平成 30 年度
自己点検評価

ADACHI GAKUEN

中京学院大学附属

中京高等学校

【教学的側面全般】

１．教育の質の向上について

（１－１）ＣＨＵＫＹＯ－ＳＴＹＬＥ定着へ

今年度も継続して「学習の基本姿勢」を全クラスに掲示、時には懇談会等で保護者にも協力していただき浸透を図った。年４回のアンケートにて定着度を確認したところ、それなりの成果はでてきているが、さらに強固なものにしていくため、生徒、教員への働きかけ方法を考えていくことが必要。教員に対しての授業規律の運用を始めたが、不十分な面も多々あり、各会にて強化していく必要がある。やはり基本はすべての面において、教員がお手本を示すこと。

（１－２）授業の質を高めること

今年度も継続して年２回の公開授業週間、研究授業の実施、その後の各教科研での意見交換を活発に行った。その中でＩＣＴ、アクティブラーニングも積極的に導入され、よりよい形の構築のため研究を続けていく。一昨年度から動き出したアクティブラーニングプロジェクトメンバーも各教科へ広まり、外部研修参加により得た新しい手法も試された。これを限られた教員だけに留まらせず、プロジェクトメンバーを増員し、ＩＣＴ共々全体に浸透させていくことが大きな課題。併せて教員への情報提供も大切。完成されたシラバスから特に評価方法の検討がなされ、課題である平常点の付け方で多くの議論がなされ、来年度からも継続していく。クラス間での差をなくし満足度を上げていくためには、そのコース、クラスに合った内容で授業を展開していき、さらなる教員の意識向上を目指したい。

今年度も全学年統一で実力テストを実施。自分の実力を知ることにより、課題が明確になり、その克服のため土曜講座の出席率の高まりがみられ、大きく前進した。それを通常の授業と関連させながら確かなものにさせていく。習熟度別授業や放課後の講習、土曜日の模擬試験の実施に加え、教科担当者全員での結果検討会など、積極的な動きを続けたことで成果に繋がったと思う。特進層の大学合格実績も、昨年に続き良好な結果であった。教員・生徒双方からの粘りで、高校三年間の成果に繋げていくことがこれからも大切な部分。それに加え、新しい試みの継続が、新テスト対応の内容だけでなく、学力向上に繋がるものになるようにしていきたい。

（１－３）行事の内容の向上

各行事終了後のリフレクションシートの内容を精査し、内容の充実を図った。身に付けさせたいポイントを明確にして要項を作成。教員にも行事の目的を強調することで、より充実させていくものとする。どちらかというと教員側で主導していた行事が多かったが、生徒の思いを重視し、生徒中心に実施させるスタイルを構築していくため、準備・運営等の協力を生徒会に依頼。今後もこのスタイルを発展させていきたい。行事の準備過程から実施まで関わることにより、たくさんの気付きがでてくる。気付かせる場面をできるだけたくさん作ることで、将来の地域貢献にも繋げていきたい。これも生徒・教員双方が当事者意識を強く持って臨むことが大切。

２．個々の進路確定について

（２－１）キャリア教育推進

主体的に取り組む基本姿勢の確立と共に、その後の実生活を営んでいく力を育むため、進路決定までのキャリア教育の実践が大きな意味をもつ。何度も実施された進路学習、外

部指導者による説明会、進路関係の校外学習などから自分の適性を見極め、現実の社会に対応していく土台はできたと思う。このスタイルと教員間の連携で、生徒それぞれの思いに対応し続けていくことが進路決定と、高校卒業後どんな人生を送っていくかにまで繋がると信じ指導にあたっていく。

（２－２）合格と内定の確保

多くの中学生と保護者、在校生とその保護者の関心は進学実績にあり、その影響力は学校にとっても大きいところ。進路指導部の様々な取り組みに加え、日常の授業、個別指導、各種試験等を積み重ねた成果。各コースでの目標をもとにした教科担当者の授業、それをスムーズに実行させるために働きかける担任の熱い思いは、成果に繋げるために欠かせないところである。就職においては現在恵まれている状況にあるが、その場しのぎの面接指導に終わらず、日常生活を内定へ結びつける常に社会人を意識させた動きをとらせるよう指導した。そして内定後の生活指導には、一層の厳しさをもってあたった。それを実行させるため、担任はじめ関係教員の打合せ会を入念に行った。今後も安定した状況を継続させるため、教員間で研修を積み、活発な意見交換をおこなっていきたい。

（２－３）新テストへの対応

昨年度から継続して、担当者による研修と教員全体への研修会を実施した。2020 年の新テストへ対応するため今後も教員間での研究をかさね、2019 年度も継承し、生徒がその成果を享受できるように進めたい。その中で、特進コースでの英会話授業はいい流れを作りつつある。

３．生活の土台が確立した学校づくり

（３－１）生活の指針と問題行動の未然防止

これまでの研鑽からそれぞれの月の特徴を割りだし、各月間目標を定め、それに基づいて全体の指針としてきた。担任としての指導も柱になる目標があることで、全体での統一した動きにも繋がり、浸透性が高まった。教員の意識向上にも一役買っている。このような目標をさだめた集中指導により問題行動抑止、ひいては日常の生活の安定につながっている。この安定感を定着させることが最大の目的。目標設定さえ間違えなければ、大きな崩れはないと思われる。生徒の生活状況をしっかり見極めていくことがポイント。

（３－２）非日常の生活指導

通常の授業日のほかに各種行事があり、それに向け生徒たちの中でクラスでの話し合いを重ね、まとまりを作り出すきっかけになっている。と同時に、楽しさゆえ羽目を外すことも考えられるため、全体統一での呼びかけを行なったり、行事担当者が生徒指導部の方針を意識しての計画実行を心掛ける等の協力体制がとれた。もう一つ見逃してはならないのが、生徒たちが思わぬ力を発揮することである。それまでのイメージが変わり、要求することもレベルアップし、さらにその生徒の能力を発揮させることに繋がる。生徒をはじめ、関係各部門で意思、計画を共有し全体のまとまりを形成していく。

（３－３）けじめある生活

精勤賞が全校生徒の約半数に達した。学校長の話しの中で必ずでてくる各授業、各行事にて、しっかり挨拶をする、身なりを整える、時間をきちんと守る、話しをしっかり聴く、清掃・整理整頓という基本的な生活習慣が確立されてきた結果だと思う。これは各教室にも掲示されており、すべての指針になっている。教育相談室、保健室、生徒指導部の連携により、体調不良生徒、遅刻、早退生徒に必ず声をかけることで、状況把握し信頼関係をつくることに務めた。各クラス担任も同様の関係づくりに励み、このような結果に繋がった。

４．外活動への取り組みと成果

（５－１）強豪クラブとしての自覚と研鑽

全国制覇はじめ全国レベルでそれなりの活躍ができたことは、まさに文武両道の学校としての基本姿勢を貫けたと思う。この活躍は身近にいる生徒にもより良い効果をもたらしてくれた。目先の勝ちにとらわれず、創立以来の理想の姿が後継者たちにも魅力的なものになり、受け継いでいってくれることだろう。

（５－２）生活へ結びつく運動成果

『りっぱな選手である前にりっぱな高校生たれ』。本校の基本姿勢である。通常の授業はじめ、登下校の間、休みの日の過ごし方、寮生活、奉仕活動、地域連携活動すべてがクラブ活動､真の強さに繋がっており､どちらも怠ることはできないという精神が本来の姿。本校クラブの成果は、年間通して変わらないひたむきさに原点がある。周囲への感謝の気持ちを持ち続けているからこそできることで、日常生活の安定に繋がっている。大舞台での活躍は平常心から。変わらぬ気持ちで試合に臨んでいるからこそ好結果がでる、成果を出した部員に共通して見られる姿である。今後も学校全体のリーダーシップを取り続けていってほしい。

【経営的側面全般】

１．募集・入学者状況

（１－１）入学者の現状

平成 31 年度入試も、定員には達することができず、残念な結果に終わったものの、495 名という割り当てが、現状の県内の中学３年生生徒数から考えて妥当な数であるか否かという観点を考えると、なかなか難しいものを感ずる。しかしながら、以前と大差ない教員数やコマ数などを鑑みたとき、定員を何とかクリアしていかないと、経営上厳しいものになることは事実であり、内部外部双方に渡って一考を要するときでもある。教員数を抑えて現状に見合う入学者数とするのか、なりふりかまわず 500 名近い生徒を何としてでも確保するのか、難しい選択が必要となる。

生徒を集めるためには、入学基準をぐっと下げて生徒募集をかけるのも一考ながら、そうすることで、今まで築いてきた中京の教育体制や地域からの評判・中学校からの評価とどう対応するのかが課題となる。また、地域的に見て、極端に入学者数が減少した地域（中学校）があるのも事実で、32 年度入試での集中的なテコ入れが必要となる。学校長始め、全教員での募集活動という学校としての強い意識を伝えていくことが必要と思われる。

もちろん原点は、『選ばれる学校』であり続けるための努力であり、単願でより定員に近い数を獲得し、昨今の少子化の中での併願者頼みを減らすこと、これが原点であり、今一度、他校の分析の下で中京の独自性を打ち出すと共に、浸透させ、理解してもらえる工夫が求められる。付け加えるなら、近隣私学の動きを見つめつつ、併願であっても確実に第 2 志望の私学たる地位を再確立しなければならない。その点から見たとき、32 年度開設の新しい「医療健康クラス」の動向は世間が注目するところだと思うので、是非とも１つの結果として広報材料となるようなものを創り上げなければならない。

（１－２）東濃地域からの支持率

東濃地区の中学 3 年生のうち､どれだけの生徒が入学してくれるかという『地域支持率』

においても、全体の数値が示すとおりで決して目標に達しているとは云えず、今後さらに少なくなる東濃地区ゆえに、より地元に密着した学校としての理解を定着させなければならない。31 年度入試から始めて「地域貢献人材育成型入試」が、今回は 4 名に留まった。期待値からすると少々少ないと思われるので、来年度以降倍以上の数を集めたい。この数は数字以上に、意識の中で地域定着率を図る指針でもあると考える。その意味からも有効な入試であるはずだし、この数値が伸びることは、全体の数値を押し上げる原動力にもなると考える。

（１－３）特別奨学生・入試制度のありかた

さらに加えて、特待生比率が高く、それを押さえ込む方策、そして半額免除での入学生を増やすという工夫も必要となる。当然クラブ戦力といった大きな問題解決がそこには存在する。増やすことが許されるならばそれは、学業特待生のみ。言うならば、特進コースが増加することのみは「良し」と云えるかもしれない。加えて、今回から始めた地域貢献人材型の新しい分野での特待生枠の設定も、時代に即応した流れであり、今後の活性化が望まれる。

31 年度から始めた形として「ネット出願」があるが、この出願は時代の流れや社会の要請といった観点からのものであると同時に、どの学校も、やるべき・そうあるべき、と考えていることを先進的に行うというところに意味がある。中京がいかに前へ前へと進もうとしているか、が、この出願形態でもあると思う。結果がどうあれ、新しいことに積極果敢に挑戦する姿勢を、プラス評価に受け止めてもらえることをさらに期待したいと思う。

（１－４）私学全体の発展を考えて

本校は県下の私学の中でも大規模学校としての位置付けで発展してきた。このことは、多くのコースを抱えていること、底辺層の生徒もしっかり受け入れ面倒見てきたこと、多くの運動面の強化が成されてきたことなど、過去の長い歴史の賜物であるが、このことは県内他私学にとっても一つの発奮材料であり模範材料であり、目標とすべき学校としての立ち居地にいることを示している。つまり社会的に本校が立っている位置は、単に本校だけの問題ではなく、県下の私学全体にとっての大きなポイントを占めていると感ずる。私学の各会に参加してそれはひしひしと感ずる。私学として発展していくこと、公立への対抗といった点からも、私学全体が発展するための先陣役としての自覚を本校は持ち、生徒募集を改めて考えていかなければならないと思う。

30 年度は他の私学も様々な募集結果になり、反省すべき部分も多いが、今後、私学同士で検討すると共に、大規模校として多くの先輩方が築いてきていただいたものを守り、生徒募集をスタートとして、県内私学の先頭を立とうとする意識を、全教職員そして生徒が持ち続けるよう、活性化させたい。県内私学全体の発展こそ、本校にとっても大きな影響をもたらすものである。

２．学園内部への進学状況

（２－１）前年度比増

31 年度入試における、内部進学については、以下のような結果となった。

経営：21 名　　看護：20 名　　保育：34 名　　健康栄養：7 名　　計 82 名　17%。

昨年の実績と比較すると看護以外は減少しており、全体としても良しとはいえない状況。看護への数が増加したことは、大学側の努力が大きく大変助かったものの、全体への注目をもう少し強化していかなければならない。健康栄養などは慢性的に少ない数からどうしても脱却できないでいるが、看護とからめた新しいクラスの運営の中で、より認知度を高める工夫をしていきたい。

三者懇談などでの直接的な働きかけや広報活動をより活発化させるべく、こちらも学校全体で取り組むべきことだと考える。

（２－２）内部進学会議

内部進学に関わる合同の会議や情報交換の場が設定され実施される中での情報は、かなり有益なものとなっており、この情報をより上手に利用していきたい。単純な現状報告だけでなく､大学での学習はもちろん生活姿勢等々に及ぶかなり細かな面まで報告受けたり、大学での指導のために高校時代の生活情報など、詳細な事柄を共有したりすることで、高校大学連携での生徒育成ができると考える。昨年度のきめ細かな動きを今後も継続していきたい。

３．教務的観点からの現状

（３－１）日常の授業を通じた地域の理解

生徒が多く入学し、満足のいく高校生活を送り、十分な学力を付けて進路を確定して卒業することが、学校運営の根幹であり、ひいては将来にわたる学校経営に直結していく事柄である事は云うまでもない。その出発点である生徒募集については先述したとおりであるが、その実現に向けての日頃の活動の根底が教務的な側面でありその一層の活性化が、今後も望まれていく。

本校では数年前から公開の授業週間を設け、同一教科はもちろんのこと教科をまたいだ形での互いの研究機会が継続されている。30 年度もまずまず活発に行われたと思うし、定着を見せたと考える。中には率先して現代の教育方法であるＩＣＴやＡＬを取り入れようとする教師も現れており、よい傾向だと思う。

今後は今の流れを継続するとともに、活動中のＡＬＰＪの一層の活発化とＩＣＴ教育への進展を１人でも多くの先生方が挑戦しようとする意識を持つことが望まれる。とくにＡＬＰＪについては参加メンバーを増加させ、大学とも連携して研究するシステムができあがっているので、より有効なＰＪにしていけると期待する。単にそこでは能動的な学びというだけでなく、ＩＣＴなどへの拡大も必然的に進むはずである。

こうした日常の授業が変わることで、入学した生徒の満足度は変化し、それが他へと拡大することで学校の大きな評価につながっていくものと信ずる。その部分にこそ学校経営の土台がつくられていく。加えて、日常の行事などもより意義あるものにしていくことで生徒の満足度は向上するはず。本校は行事ごとにリフレクションシートを教員に配布し、忌憚の無い意見を引き出し次へつなげようとしており、その方針の一層の進展と拡大を期待したい。

（３－２）授業スタイルの反省と確立

授業を受けるための学習の基本姿勢の定着を呼びかけてきた成果が少しづつ現れてきているようで評価できる。生徒へのアンケートによる回答ではプラス要素が増加している部分を信じ、一層の進展を望みたい。もちろん 100%の生徒、100%の機会とはいえないかもしれないが、少しでも近づこうとする状況が見られると思う。

むしろ３０年度教務部として苦心したのは、教員自信の授業に望む姿勢であったようである。教員はそれぞれの個性の下で各自のスタイルを確立させており、中々脱却しにくいという現状がある。もちろん、個々の個性は存分に生かし活用しつつ、そのうえで、中京全体に流れる統一的な指導方法の確立も望まれるところ。

生徒が多様化している時代だからこそ、学校統一の原則が確立していないと、生徒教師双方がバラバラのまま進んでいくことがあり、それは個性の開花ではなく、単なる勝手きままなものの象徴になりがちである。授業だけのことではないが、日常、生徒にとっても

教師にとっても、最も時間的に多くの力点が置かれるべき授業だからこそ、生徒はもちろんのこと、教師自身にも統一のスタイルを確立させる必要を感ずる。
　授業内容と同時にそれを取り巻く形が凛としたものであればあるほど、一時間の授業の中身は一層濃いものとなり、周囲からの理解が強く定着していくものである。学校経営そして学校運営における土台として、一考していきたい。
（３－３）教員数と授業時数
　生徒により手厚い教育を施すためには、一対一にしてあらゆる面から面倒を見る体制つくりを根本とすべきである事は云うまでもない。それは究極にしても少しでも近づく努力は可能であり何とか、『面倒見の良い学校』でありたい。しかし経営的観点からの配置も必要で、無尽蔵に教員を採用する事もできず、また、教科によっては絶対的教員不足がある。現代は教科によらず教員そのものが不足するという「採用氷河期」とさえ言われるような時代であるだけに、計画的かつ迅速な採用と、現有勢力での工夫が望まれる。
　内部での自助努力をすると、専任教員一人当たりの時間数を増やし非常勤にかかる時間を減らすことや、少人数選択のコマを極力減らすなどの工夫も必要とされる。クラス数を減少させる、つまり、カリキュラムで特色を出し日常の生活は大人数クラスとしつつ担任数削減などの方策も必要となる。教員募集への計画性や非常勤講師削減の方策など、真摯に人事問題を考えるべきときでもあると思う。
　３０年度はなんとか凌いできた感があるが、これを凌いできたと捉えずに、当たり前と考えられる土壌ができると良い。しかし同時に新旧交代の波は長い未来を考えれば必然的に求めていくべきことでもあり、新しい風を入れつつ、人件費等への大きな影響の無い人員配置ができるよう工夫が今後必要となる。

４．生徒指導面の強化と安定化

（４－１）問題行動の未然防止
　精勤主義、挨拶礼儀の徹底、外面指導等々、本校で行われている生徒生活指導上の土台は、すべて生徒を将来社会の中で有為な人材として育成していくための土台である。そしてひいてはその積み重ねが、自他共に小さな過ちを逃さない、問題行動の未然防止へとつながっていく。本校の生徒指導部が入退室時などに声をかけながら生徒の様子を見たり図ったりすること、月間で生活目標を掲げて呼びかけること、生徒会から全校生徒への全校放送等で呼びかけることなどは、これらの活動の一助になっていると思うし、そのおかげもあってか、３０年度はもちろんここ数年、マイナスの数値は確実に少なくなっている。
　今後もこの方針は継続させることと、学校長が集会時に『建学の精神からスタートし日々の約束事』まで、何らかの形で伝えていくことも継続させたい。加えて、副校長が、教員や生徒を対象に学校長のいうところの約束事などをしっかり復唱し確認する姿勢は、その定着の為の無意識の浸透に大切なことであり、ここにも未然防止や生徒指導面への大きな手助けになってきていると思う。その意味からも３０年度の呼びかけやその実践は評価できると思う。
　今後に望みたいことは、校長や副校長、そして生徒指導部長あるいは学年主任などが訴えることを、担任レベルであるいは教科担当者レベルで、自分の言葉に置き換えながら常に繰り返すこと、倍増させること、こそ、望まれるものである。安心安全を意識できる学校としての確立こそ、地域に受け入れられる学校として存在していく大きな鍵である。
（４－２）問題行動への対処
　問題行動が起きてしまった場合の対処指導として本校が貫いているのが、該当生徒にし

っかり寄り添うこと、しっかり話しをしながら一緒に活動すること、である。その土台の下で奉仕作業をしたり自学活動をしたりしている。その中で生徒には『自己有用感』を抱かせることで成果は挙がっていると思う。対処指導そして未然防止活動双方の結果だと思うが、３０年度の問題行動件数は２９件（一昨年度も同数）であり、1400 人規模の大規模校と言う観点から見れば小数でありそこには生徒の落ち着きを感じることができる。その部分への世間の注目は、知らず知らずに経営に響き、影響を与えていくものであるはずである。

ここ数年問題行動として目立ち始めているのが、社会全体にも共通する情報モラルの問題。３０年度にもいくつか注意すべきことがおき、対処した。対処については今後の事も考慮して適切であったと思うが、この分野への警鐘をきちんとさせたい。県ともタイアップしてのネットパトロールの利用などを通じて､情報モラルを現時点だけのことではなく、場合によっては一生涯に渡る事犯であるという認識を植えつけさせたい。社会に生きる人材としてのモラル構築も大きな教育である。

５．通信制課程の拡大

（５－１）生徒数とその現状

創立以来７年間が経過し、様々な生徒を受け入れ、また送り出してきた。３０年度の在籍は２６６名となり、年々そのニーズが増えてきていることは通信制開校の目標を確実に達成しつつある。ただし問題は退学率が前年より増えていることで、社会に定着した制度ゆえか、安易な入学や退学が多くなってきている感がある。性格上致し方ない部分もゆがめないものの、１つの教育機関としての根底を生徒が真摯に受け止められるように、日々の学習やサポートを必要とする。

（５－２）広域制としての拡充

３０年度については、今後の少子化と新しい教育の場の創設という観点から、広域制としての性格をさらに拡充させるべく努力をし、学習センターとして静岡で３校を開設、さらには初の技能連携校との提携も実施。まずまず順調な一年間であったと思う。新しいものへの期待を持つことができると同時に、拡充すればするほど、本校との連携をより強固なものにしなければならない。中京としての性格や教育理念という最も核となる部分を疎かにせず、しっかりと伝え、継承していくことができるよう日々の連絡や確認を怠り無く実施するという課題がある。また、教務システムにおける連携は業務の遂行をスムーズにしていくために不可欠であり、きちんとしたシステムを作り上げなければならない。

（５－３）人事の件

２９年度まで全日制課程の授業との兼任で、何名かの先生方を、全日制でありながら校務分掌として通信制業務実施という形式をとってきたが、やはりかなり窮屈な部分が大きく、現状では諸々の業務が滞ってきた。

３０年度については校務上の専門性をより強めて、通信専属者を配置し、学習センターにおける協力などの工夫で、業務上の『中途半端』な対応は少なくとも以前より解消できたと思う。通信制が拡大すればするほど、この体制をより強めていく必要があると感ずるが、全日制とのバランスや人事配置が当面の課題となっていく。先生としての性格と同時に、募集や新提携などの広報全般面、本校と他の学校との管理的側面、等々、従来の教師像からは離れた部分の業務を認識して事に当たる人材育成が必要となる。３０年度の在籍が２６６名であったが、この在籍数が今後増加し、４００名を超えるようになったあたりが、１つの人事改編のラインになると考えている。

６．部活動を通じた学校活性化

（６－１）校技の活躍と実績

校技：硬式野球部の活躍は、中京高等学校にとって運動部の大きな指針でもある。いろいろな見方はあるにせよ、やはり甲子園に寄せられる注目度の高さは、他の運動部とは少々違うもの。創立者が校技と指定した意味つまり、全校一丸となっていくことの尊さやそれを生徒が感じることで生徒自身に芽生える愛校心や生徒同士のコミュニケーションなどを、硬式野球部の活動を通じて体感させたい。それだけでなく、硬式の応援を通じてチアリーダー部員や吹奏楽部員が増加しており、これらの部活を意識して本校を考える中学生も現状何名かは存在する。また単純に、これらの部活動活性化は、甲子園を通じた学校の雰囲気が本校への期待や認識を深化させ、生徒募集へとつながるものでもあると考える。

また硬式野球部員自身が、この体験を通して全校の力や学校としての応援の貴重さなどを感じてくれることで、自然の内に学校の模範たる意識を自ら養ってほしいと期待する。大垣日大を初めとする県内の壁、東海大会準決勝での惜敗、等々を発奮材料にできる精神力を養うことが課題である。技術は複数校、紙一重と思われるだけに、一瞬の隙を作らない心、一瞬の隙を大切にできる集中力、これらを培えるような部員指導をスタッフに求めたい。

（６－２）日本一の重みと思い

軟式野球部が２９・３０年度と、『全国２冠２連覇』を達成した。まさに軟式野球界にとって本校は、頂点を極めていると思われるが、この日本一の重みと思いを、他のクラブも「傍観」するのではなく「自身」のこととして捉えてほしい。競技人口や競技参加校の少ない部活である事は事実かもしれないが、しかしだからこそ、そこに集中する精神力と技能は、人口の多い競技以上の過酷さがあるはずである。カヌーやボウリング、レスリングで全国得ベルの活躍をする生徒と共通するものである。

総てのクラブが団体としての力量を備え、日本一を真摯に目指してほしいし『自分たちにも十分可能な栄冠である』という意識の下で、より一層の発奮を促したい。３０年度は多くのクラブが全国へと駒を進め、中には１３年ぶりあるいは１３年連続といったステップもあり、本校強化部としての安定感は感じるものの、あと一歩の壁を乗り越えてほしい。硬式野球だけでなくその成果こそが、大きな学校全体の課外における活性化となり、そのまま課内の活性化へと響くものである。

７．教学を支える事務・施設部門

（７－１）事務経理管理の確実さ

事務長以下経理面での管理が厳正に行われており、監査の方からの評価もいただき大変ありがたいものである。また補助金にしても昨年以上に多くの補助金を県より獲得することができた。事務長としてのチェックや経理課員の日々の的確な業務に帰すところである。厳正な経理業務があって始めて、教学を担当する教員の活動が支えられているという認識を全教員が持たなければならない。同時に補助金の獲得については日々の教学活動の成果によるものが大きく、それだけ活発にそして的確に活動できていることの証明でもある。教学と事務経理が表裏一体となって今後も活動できることを望む。

（７－２）施設の管理・環境美化・図書館管理

教職員の協力もあって、大きな経費を必要とする前に、施設改修などができたと思う。備品の購入や改修工事などについても、計画的に予定の事業が推進できたと思われる。改修は極力小額で、すべき工事は見積もりの予定通りという範囲で進捗できた。いくらかの

出費を伴う分野であることは間違いないが、その施設の状況を見学して本校への入学意思を固める生徒も当然おり、生徒募集に直結する部分である。加えてそういった面があるだけに、その後の生徒の使用状況についてきちんとした指導が望まれる。本校が掲げる『５つの約束事』の実践につながることであり、先生方の指導に大いに期待したい。

図書館管理という点では３０年度には専属の司書を配置し運営できた。読書のための図書館運営に加えて教材研究など今までに無い多面的な図書館のあり方を、今後検討していきたい。

（７－２）情報関連

多くの個人情報が集まり生み出されていくのが学校であることを、全教職員が再認識するよう、折に触れて注意を呼びかける必要あり。また生徒に対しても同様で、ＰＣ授業時の個人のパスワードを忘れた生徒への注意とそれを通じての情報に対する認識を深める指導などができたと思うが、３０年度はそのような該当生徒が確実に減少してきていると思われ、良い傾向である。

ホームページ管理をする上で継続させるべきことであるが、本校のホームページの更新度合いは全国でもトップレベルだと、某大手教育企業に評されている。例え小さなニュースであってもこの動きは止めることなく継続させたい。また２９年度後半から、スマートホンでのＨＰ掲載をよりわかりやすくという方向で、デザイン等の改革に着手した。こちらからの能動的かつ迅速にして多種多様なネットにおけるＰＲを通じて、本校理解を一般の方々に認識してもらいたい。

【各校務部門】

１　教務部門

（１）教学関連

１）公開授業週間

年２回の公開授業週間に各教科で研究授業（授業見学）の実施および、研究授業後、教科研での授業についての意見交換が定着した。さらに、ＩＣＴの利用やアクティブラーニングを取り入れた研究授業が見られるようになり、授業の在り方について一石を投じている。ただし、公開授業週間を終えて提出する振り返りシートの提出率が過去最低となっており、教員間の温度差が大きくなっている可能性がある。

公開授業週間の在り方については、引き続き教科主任会議にて討議し、教科研にて意思統一することで活性化を進めていきたい。

２）新授業形態研究

昨年度発足したアクティブラーニングプロジェクト（以下ＡＬＰＪ）のメンバーは社会科・総合科が中心であったが、今年度は主要５教科から１名選出し各教科での授業の在り方について検討を行った。積極的に外部研修に参加し、まなボード（小型ホワイトボード）を利用した授業など、担当者がいくつかの新しい授業形態に挑戦した。しかしながら、そのノウハウの共有に至っていない。来年度は、メンバーを倍の人数としＩＣＴの利用を含めて研究し、教員に情報提供を行いたい。

３）学習の基本姿勢の徹底

今年度も「学習の基本姿勢」を全クラスにて掲示し、ＰＴＡ懇談時に生徒・保護者に資料を付して学校としての取り組みとして通達している。年４回のコミュニケーション力アンケートに授業姿勢についての項目を盛り込み、アンケートを定着度の確認と「学習の基本姿勢」の再確認の場としている。アンケート結果は、例年とほぼ変わらなかっ

たが、実状よりも良い数値が出ているようである。アンケート結果を鵜呑みにすることなく、教員から生徒への働きかけが増えるよう、教員に対する働きかけを工夫していく必要がある。本年度から「授業に臨むにあたって」（対教員授業規律）の運用を開始したが、教員への浸透度が低く徹底とは程遠い状況であった。生徒の授業姿勢をたださせるにあたって、教師が背中で教える状況になるよう、職員会議等および各教科研にて働きかけを強化する予定である。

４）シラバスの作成

引き続きシラバスの修正の年度とした。課題である平常点については、評価の方法以前に１００点に加える方法について問題となった。この点について、結論は出ていないが、先生方から問題定義されたことが大きな収穫であった。来年度はこの点についての検討から平常点の付け方までを課題としたい。

（２）行事関連

前年度のリフレクションシートにあった意見を反映させ、内容の充実を図っている。さらに、身に付けたい力を明確にして要項を作成した。今後より教員に対し行事の目的を強調していくことで、行事をより意味のあるものとしていきたい。

行事の多くを教務２課が担当していたが、生徒会にて生徒中心に実施したほうが良いと思われる行事について、生徒会に準備・運営の協力を依頼した。次年度以降、生徒会のかかわりを増やし、再来年度には生徒会主体の行事として、生徒の活躍の場を増やしたいと考えている。

２　進路指導部門

（２－１）生徒一人ひとりが目指す自己実現を支援する進路指導の実践

①内部進学課創設６年目、大学・短大との連携会議、高大連携会議を開催し生徒に対する告知活動、教員向け告知など各種行事を実施した。

②学年・コース・担任と連携し進路説明会の実施及び進路学習を行なった。

進路指導の行事として進路説明会、校外進路学習、進路学習は定着した。

ポートフォリオについて今年度より進路サポートを各クラスファイリングし運用した次年度は本校オリジナルのもので活用をする予定である。

③基礎力向上のため教務部、各コースと連携した対策を実施した。

④進路決定後の指導（進路・就職）について担任・コース主任等と協力し指導した。

進路が決定した後に成績が下降する傾向の生徒が多く、また問題行動に至る例があり、その未然防止に対して継続的な指導と検討を続ける。

⑤大学入試改革に向けた対策・分析をした。

進学クラス向け模擬試験の継続と普通コース生徒向け実力診断テストの導入を検討し各コースに提案した。

（２－２）進路状況

①国立大学合格１１

金沢大学、静岡大学、愛知教育大学、名古屋大学２、三重大学、広島大学２、

徳島大学、長崎大学、宮崎大学

②公立大学合格２

石川県立大学、福井県立大学

③四年制大学進学２４４

④短期大学進学４７

⑤専門学校進学９６

⑥就職６８（学校推薦６２、公務員６）

３　生徒指導部門

学校運営方針を柱に、生徒指導部として『豊かなコミュニケーション能力を備えた人間性・社会性を確立させる』ことを目的に、以下の項目について、指導を展開した。

（３－１）精勤主義の推進

欠席・遅刻・早退に対する指導や時間厳守について、入室や外出および早退を許可する際に、生徒の健康状態や表情、精神状況を観察しながら声かけを実施し、安心感や信頼関係を構築することに努めた。学年末の精勤賞対象者は各学年とも在籍の約 3 分の 1 以上の生徒が対象となった。今後は遅刻やなるべく早退をしないような意識付けを検討したい。

（３－２）挨拶・礼儀の徹底

月間生活目標や校内放送を通じて挨拶や言葉遣い、他者への礼儀について呼びかけを実施した。また、登下校時の校門指導や生徒会主体のグリーンキャンペーン、MS リーダーズ活動、中学校との合同挨拶運動など、校内外で挨拶運動や清掃活動を行うなど、今後も自然と挨拶が飛び交い、他者への礼節が浸透するよう継続的な指導を展開していく。

（３－３）感謝と奉仕の精神を高揚

ボランティア活動や募金活動などを通じて感謝や奉仕活動への意識を高めてきた。
また､他者との関わり合いや思いやりなど､対人関係についても月間生活目標に組み込み、意識を高めることに努めた。特に、ボランティア部の災害支援寄付金、各クラブの自主的な校内外の清掃活動、拾得物の届け出や人命救助など、自発的な取り組みが増えてきたので正なる評価を高めながら、善行活動を更に推進していきたい。

（３－４）外面指導

『是は是、非は非』とし、年回 6 回の定期的な外面チェックおよび通年で生活面評価カードを活用して外面指導を徹底してきた。また、集会時等の正装日について、早めの呼びかけをしながら、正装できなかった生徒については反省文指導として、次回への意識付けを行った。生徒が学年の上がる毎に規定を理解し、それに合わせるようになってきていることから、全体的な指導は落ち着いてきたと捉えることができる。今後は、予防の観点から制服改良や、鞄や靴への指導等といった次のテコ入れを検討しながら更に統一感ある状況、引いては生徒募集に良い影響が与えられるよう、良い方向性を推進していきたい。

（３－５）問題行動への対応

積極的な予防的指導として、月間取り組み目標の掲示および職員会議等で各学年・担任に時期的・学年毎に頻発しそうな事案等への注意喚起、生徒への呼びかけを行ってきた。

対処的指導としては、問題行動を起こした生徒に対する特別指導において、一定の善行活動時間を設け、各指導段階に応じて校内外の清掃や学習活動を行いながら、一緒に作業し、声かけをしながら規範意識の再構築と社会性、愛校心や自己存在意義を感じさせる中で『自己有用感』を築くことに努めた。問題行動件数としては、29 件（平成 29 年度：29 件）と、全校生徒数の規模から考えると少なく、落ち着いた状況で止まっている。今後は生徒会からの呼びかけなどを活用し、より生徒達自身で意識ある行動を考えさせたい。

４　入試広報部門

（４－１）入学確定者数（３０年度３月末日）

コース	クラス	男子（人）	女子（人）	合計（人）
文武	ｱｶﾃﾞﾐｯｸｱｽﾘｰﾄ	１１	１	１２
	体育	８６	６	９２
特進	エクシード	８	４	１２
	プロシード	７	９	１６
国際	国際	９	１０	１９
普通	プログレス	１２０	１２６	２４６
商業	ビジネス	３０	１７	４７
		２７１	１７３	４４４

※定員 495 に対し、-51 名。併願者は 13 名のみ。

（４－２）定期的な中学校訪問

5 月より定期的な訪問を開始し、月に 1 度程度は必ず顔を出す事を心がけ、在校生の成績や生活状況、進路先等、高校入学後の変化を細かに説明することで本校への信頼度を高めることはできた。しかしながら、瑞浪、多治見地区では大幅に入学者を減らすことになった。次年度はさらに A ランク教員（中京への信頼度が高い教員）を増やすため、広報担当者のスキルアップ研修等を実践する。また、学校長および広報部長も重点地区には地区担当者と同行訪問し、本校の熱意を実感させる。

その他として、今年度県下初の「ネット出願」を行うにあたって、中学校からの苦情等多数考えられたが、全くなかった。これは時間をかけ丁寧に説明した結果であり、定着するまで今年度同様継続的かつ丁寧な説明を実践していく。

（４－３）東濃出身者１０パーセント獲得

この 10 年一番意識してきた数値が地元からの入学率である。目標数値を 10%に設定、H29 年度ようやく目標を達成し 10.65%、H30 年度は 10.34%を獲得、2 年連続で目標を達成した。しかし、H31 年度においては 8.86%に減少。その要因は瑞浪・多治見地区生徒の入学者減少と、進学クラスへの入学者が半数までに激減したからである。この 2 点を改善しなければ 10%超は非現実となる。また、併願者が 6 名という数字を見ても単願者で定員を確保する方策を検討しなければならない。

しかしながら、今後さらに東濃地区の中学生数は減り続け、平成 32 年にはついに 3000 人を割り 2960 人、36 年には 2794 人となる。10%確保という目標から 11%に次年度は変更しなければ定員の確保は厳しい現状。よって各地区の数値目標は、中津川、恵那、土岐から 60 名ずつ、瑞浪が 50 名、多治見が 90 名。合計 320 名確保を目指す。

この目標を達成するため、各コースとの連携を高め、魅力を最大限に PR 出来る方法を

構築していく。また、公立対策として、他私学と共同で合同説明会を実施、その他にも多治見地区で出張型個別説明会を開催するなどの計画を実践する。その他には、「地域貢献人材育成型入試」の更なる拡大で初年度は 4 名が入学。次年度は各地区から 2 名を目標とし、10 名のレベルの高い生徒を入学させたい。

（４－４）見学会・説明会の推進と出願への結びつき

夏季見学会では、毎年マイナーチェンジを繰り返し、一昨年度からは「生徒主体」というテーマのもと開催。生徒間および教員と協力し合い、中学生には本校の「生徒と先生の距離の近さ」を目の前で見てもらうことができた。今後もさらにマイナーチェンジを繰り返し実践していきたい。

また、秋のコース別説明会においても代表生徒がプレゼンを実践、中学生の質問にも答えるなどの方法をとったが、こちらも好評であった。生徒主体というスタイルにブラッシュアップをかけるため、生徒への事前教育等研修を次年度は積ませ、本校の魅力を中学生、保護者に伝えていきたい。

そして、出願者数については、昨年度はじめて見学会との結びつきについてアンケートをとって検証した。その結果、半数の生徒しか夏季見学会に参加していないことが判明。この見学会は、中学生、保護者、中学校教員にも好評であるため、動員数を増やすことが入学につながると考えられる。よって中学校への動員依頼を強化する。

（４－５）公立高校との比較

公立高校も定員確保が厳しい状況が続き、確保できたのは多治見北高、多治見高、土岐商高、恵那高、恵那南高の 5 校のみ。それも数値的にはギリギリである。その中で一昨年度プログレスの生徒は 267 人、今年度は若干少なかったものの 246 名となった。よって確実に生徒数を確保できるのはプログレスであり、教育内容のさらなる充実を図ることで、公立との差別化を推し進めなければならない。今年度は「医療健康クラス」の設置で、すでに 45 名程度がこのクラスを希望していることから、特に看護志望者の入学者を新規開拓できたと考えられる。よって、オール 3 レベルの生徒確保を目指し、プログレスのレベルアップを図りたい。

同時に最重要課題が特進クラスの生徒確保である。大学入試改革が再来年度始まり、今が最大のチャンスであると踏んだ 30 年度であったが、本校の英語教育、放課後講習、ICT 活用授業、海外研修等受験生には全く受け入れられなかった。その原因は塾での進路指導であり、本校の「塾不用」戦略はすでに時代遅れとなった。よって、例えば、放課後に地元の有力な塾の講師に講義をしてもらうなど、次年度塾とどう付き合っていくか本格的に検討する。

（４－６）入試方法について

入試方法については、一昨年度一部変更し推薦入試（特進系以外）では作文課題を一問増やし、挨拶について記述させているが、入学前の事前教育的な面もあり今後も継続していきたい。また、受験という意味では事前に中学校との連携を密にして、その生徒にあった合格を出せた。特に学業面で不安な生徒には既定の基準のみならず特別面接を課すなど中学校の要望にも応えながら実施できた。

次年度検討しなければならない課題は入学基準である。40 名平均のクラスにするため、特進、文武の基準を検討しなければならないので、数年着手していない課題なので次年度取り組む。また、「地域貢献人材育成型入試」で 4 名入学したが、人物的に良好な生徒が入学。よって、さらに拡大させる予定。

新たな取り組みとしてネット出願を開始した結果、大きなトラブルもなく中学校からのクレームもなかった。これは各中学校に対し継続的かつ丁寧に説明を行った結果であり、油断することなく継続的に行うと同時に、他私立高校にも促しネット出願を広めていきた

い。
（４－７）特待生の厳正化について
　特待生徒のお陰で多くの生徒が集まってくれることは事実であるが、経営的観点から考えれば当然特待生はより絞込みをかけていかなければならない。半額支給者で数を増やすことが出来るように､また特待の条件でなくとも入学を決めてくれる教育内容の浸透など、クラブ監督の協力の下で、継続的に考慮しなければならない。
　学業面での特待は、若干基準を下げてでもこれから数年人数の確保を行っていきたい。

５　校技・強化運動部

（５－１）校技
　硬式野球部は２年ぶりの夏の甲子園出場が有力視されていたが、準々決勝で敗退。新チームは県大会優勝、東海大会では準決勝で、優勝した東邦高校に大逆転負け。しかし、春の選抜出場にわずかな望みをかけ吉報を待ったが、残念な選考結果になった。選抜は勝って決勝に進まなければ出場はならないことがよくわかった。ただチーム力は県下ナンバー１であることに変わりはない。
　学校生活においては、全体に安定をしており、応援したくなる野球部、選手である前に高校生としてレギュラーになるというスタッフの思いが浸透した。ここ５年間の入部部員数が１８７名で、退部者が０。寮生活でも特に問題はなく、選手の強い意志と、部長、監督以下スタッフの日々の地道な声かけはじめ、技術指導、人間指導の賜だと思う。
（５－２）強化運動部の活躍
　軟式野球部が夏の選手権大会、国体の２冠を２年連続で達成。異次元の強さをみせた。選手権県大会、東海大会、全国大会、国体の全試合を無失点。投手力、守備力、攻撃力すべてで他を圧倒した。今年は３連覇がかかり選手は重圧がかかると思うが、強くなるためスタッフ､選手一同いつもどおり自分たちのスタイルを貫いている｡インターハイ個人で、柔道男子が準優勝と５位、レスリング女子が準優勝、選抜大会団体でソフトテニス男子第５位。他の全国大会で、レスリング女子がジュニアクィーンズカップで優勝とベスト８、優勝者は世界カデット選手権に出場、男子が全国高校生グレコローマン選手権で優勝。国体では、個人でレスリング男子が優勝（２連覇）とベスト８。弓道男子団体（３人中本校２人）で優勝。クラブではないが、カヌーで第４位の成績を残した。
（５－３）強化部の見直し
　全国大会には出るが上位に進出できないケースがみられ、その現状を捉え、入試広報部と連携して継続審議していかなければならない。
（５－４）部活動を通じた愛校心育成
　夏の高校野球は準々決勝で敗退したため、全校応援ができず大変残念だった。昨年盛り上がりをみせた準決勝、決勝の全校応援を知る２･３年生から「全校応援ができずに残念でした」との声をたくさん耳にした。今年こそは全校生徒に甲子園を経験させたい。あの一体感を実感する経験は大きな意味を持つし、甲子園で活躍する野球部員が文武コース以外のクラスにも在籍し、出場選手を身近に感じられることは、他の生徒にとってのある種の財産だとも思う。そう自分を見てくれることを体験する選手にとっても、それは大きなものとなるはず｡何といってもあの場での雰囲気に乗れることは野球ならではのことと思う。
（５－５）模範生たる運動部員として
　日常の生活が技術の向上につながり、試合の勝ち負けにつながっていくという認識が定着してきており、裏表がなく明るい雰囲気の部員が多くなった。それなりの意識を持って入ってきていることに加え、各クラブのスタッフの「高校生としてどうあるべきか」の部

分の指導が行き届いてきており、今後も教務、生徒指導と連携しながら向上させていきたい。
（番外）キッズアカデミー
　新たに参加したサッカー部、チア部、吹奏楽部が好評であった。サッカーは内容はもちろん、人工芝での練習が子どもにとって本当に嬉しかったようだ。参加者の母親にたずねてみると小雨なら外でやってもらってもかまわないとの返答。体育館でフットサルもいいのではとのアドバイスも頂いたが、これは現実には厳しい。大雨だと実施は無謀。チアは大盛況。指導者のレベルの高さを母親たちが絶賛。子どもの中には「私は中京でチアに入る」と言ってくれた子もいた。吹奏楽も丁寧な教え方でわかりやすく、ニーズの大きさを感じ今後も継続していく。

６　通信制課程部門

（６－１）生徒数まとめ

	新入	転入	編入	合計					
過年度生	30	81	14	125	…H30 年度当初の在籍数				
H30 年度入学	50	86	5	141	退学	除籍	転出	卒業	年度末
合計	80	167	19	266	6	2	1	85	172

　退学者率は 3.4%(昨年は 2.9%)
（６－２）進路状況
　前期卒業生 7 名、後期卒業生 78 名の進路確定
　大学 10 名（内部進学：0 名）…内部進学率 0%
　短大 7 名（内部進学：保育 2 名・健康 2 名）…内部進学率 57%
　専門 19 名
　＊進学生徒全体 36 名中、内部進学者 4 名…内部進学率 11%
　就職 11 名、社会人等 1 名
（６－３）各サポート校・面接指導施設への管理監督と指導
　各サポート校および面接指導施設へ本校の教職員が数回にわたり訪問。
　各サポート校および面接指導施設において独自の判断で教務上の内容が進まないよう頻繁に電話連絡
　原則として、本校の教務が認定したうえで教務上の内容は進行
（６－４）新たに面接指導施設・技能連携校の開設
　静岡学習センター・沼津学習センター・伊豆函南学習センターを平成 31 年度より開設
　技能連携校として、未来を創る学舎（静岡校・沼津校・伊豆函南校）と平成 31 年度より提携
（６－５）充実した管理センター運用と教務システムの効果的活用
　管理センターにて添削課題・面接指導・試験が管理　→　スムーズに業務が進行
　教務システムを共有することが可能となり、利便性向上
　教務システム導入２年目となり、より多くの機能を利用することにより効率性アップ
　ただし、本校の仕組みと教務システムの仕組みが合わない部分あり
　本校の仕組みを要再考、教務システムのカスタマイズを要検討

７　事務部門（情報・施設・図書含）

（７－１）3 年生授業料等未納

卒業生 477 名授業料全員完納

（７－２）平成 30 年度岐阜県私立学校教育振興費補助金

￥485,482,000 獲得（昨年度　￥483,209,000）

【内訳】

一般事業分		￥409,681,000	（昨年度　￥413,945,000）
教育改革推進特別補助金(一般分)		￥28,488,000	（昨年度　￥25,003,000）
〃	（知事指定分）	￥47,313,000	（昨年度　￥44,261,000）

（７－３）平成 30 年度事業計画執行

① 当初計画した事業予算については予定通りに執行

・西館１階トイレ（男子トイレ、女子トイレ、女子職員トイレ）改修工事

・校内樹木伐採剪定工事　　・空調新設取替工事（北１号館、東館一部、柔剣道場）

・校舎入口足ふきマット整備　　・ネット出願構築

・ＬＥＤ化（本館、東館）工事（リース）　・西館中央玄関タイル補修工事

・生徒用机椅子・教卓取替　　・レイコールドワイヤレスマイクシステム設置

・柔道場改修工事（県学校特色事業採択による）　　他

② 当初計画以外の事業執行

・消火栓ポンプ取替工事　　・ソフトテニス部部室電源工事

・他　軽微な修繕

（７－４）整理整頓・教育環境（施設・設備）美化

① 施設巡視による汚れ・破損箇所等の早期発見・早期修繕については、教職員の協力により概ねできた。しかし、教室床・壁・天井の修繕、黒板の張替等々教育環境の美化を含め改修改善を図る個所が多く残っているため、今後事業・予算化し計画的に実施していく。

② 施設・設備の環境美化については、昨年並みの推進状況であった。学校環境美化に関して、一部クラブ生徒に依存しているところが本年度も大きかった。生徒への環境美化推進の指導の継続、教職員の整理整頓に対する意識の高揚を今後も継続的に図っていく。

③ 学内寮についての環境整備に継続的に着手してきているが、すべてにおいて課題が多く山積している。各部屋の修繕、ベットの購入、電燈のＬＥＤ化など今後事業・予算化し計画的に実施していく。

（７－５）情報関連

① 情報機器・備品による教育活動・校務への支障についてはほぼなかった。

② ホームページの更新頻度については、全国でもトップレベルである。ホームページもリニューアルし昨年度より一歩前進したものになった。

③ ネットワーク機器の更改については計画通り進捗できた。

④ 特進クラスＩＣＴ化授業のためにタブレットを４０台購入しているが､これを利用する環境づくりの進捗が少なかった。来年度は確実に実施する。

（７－６）図書関連

①司書職員採用により、図書館環境の改善に進捗があった。次年度以降も年間読書冊数

の増加に努めるとともに、図書館の役割についても見直しを図っていく。

②教員の教材研究材料・資料の整備という観点をもって図書や視聴覚資料の購入をするなど、これまでできなかったことに着手してきた。生徒のためだけではなく、教員にとっても必要とされる図書館として役割を果たしていく。